

平成26年度

「ふゆトピア・フェア」を通じた地域活性化 —2014ふゆトピア・フェアin釧路を開催して—

開発監理部 開発調整課 ○古川 勇
留萌開発建設部 道路計画課 高橋 哲生
札幌開発建設部 都市圏道路計画課 原田 洋平

「ふゆトピア・フェア」は、国、地方公共団体、地域住民、企業などが連携し、冬の課題解決、冬を活かした地域づくりに関する情報発信や意見交換を行うことにより、積雪寒冷地域の活性化や魅力あるまちづくりの実現を目指して、平成25年度は北海道釧路市において開催したところ。本発表では、「ふゆトピア・フェア」の開催を通じた地域活性化の取組について、他機関、地域との連携・協働を中心に報告するものである。

キーワード：地域活性化

1. はじめに

わが国は、世界でも有数の多雪国であり、国土面積の約半分を豪雪地帯が占めている。これらの地域では、暮らしや経済活動などにおいて、雪や寒さに対処するかが重要な課題である。このため、北海道では、雪に強い快適な冬の生活環境づくりを目指した施策・技術開発などが推進されるとともに、生活文化や観光面における冬の積極的な活用と魅力の発信が進められている。「ふゆトピア・フェア」では、国、地方公共団体、地域住民、企業などが一堂に会して冬の課題解決、冬を活かした地域づくりに関する情報発信や意見交換を行うことにより、各主体の活動及び相互の連携・拡大に寄与し、雪国の活性化や魅力あるまちづくりの実現を目指し開催している。

2. ふゆトピア・フェアの開催経緯

ふゆトピア・フェアは、東北・北陸地域で開催される「ゆきみらい」と連携しながら、シンポジウム、研究発表会、展示会、除雪機械展示などを3年に1度、北海道で開催してきている。北海道最初の開催地は昭和61年度の札幌市であり、以降、旭川市、小樽市、網走市、旭川市、千歳市において9回開催され、平成25年度の釧路市は、北海道としては第10回目の開催となる。

3. 開催地「釧路」の概要

釧路市は、北海道の東部、太平洋岸に位置し、「釧路湿原」「阿寒」の二つの国立公園をはじめとする雄大な自然に恵まれ、特別天然記念物「タンチョウ」や阿寒湖の「マリモ」をはじめとした貴重で魅力ある自然資源が Isami Furukawa, Tetsuo Takahashi, Yohei Harada

豊富に存在する。また、酪農を中心とした農業生産、国内有数の水揚げ量を誇る水産業、大規模な食品・製菓工場や製紙工場、国内唯一の石炭鉱業所が存在するなど、道東の中核を担う都市である。

気候の面では、夏期は最高気温が20度前後で推移する涼しい気候で、冬期は道内各都市と比べ積雪量が少なく、過ごしやすい都市である。

4. ふゆトピア・フェア開催までの取組

ふゆトピア・フェア開催までには、次の取組を行った。

(1) 開催地の選定

開催地の選定に当たっては、①これまで道東の太平洋側での開催実績がないこと、②釧路市街は比較的少雪地域ではあるが、自然資源を活かし冬期観光振興に取り組んでいること、③道東の玄関口としてインフラ（道東道延伸、釧路港の国際バルク港湾選定、釧路港へのクルーズ船寄港の増加）の整備が進みつつあること、などの理由から、釧路市を開催地として決定した。

また、開催会場については、これまで、屋内で行うシンポジウム・研究発表会・展示会と屋外で行う除雪機械展示・実演・競技会の会場を近隣で確保することが困難であったが、本フェアにおいては、開催地である釧路市の協力により、釧路市観光国際交流センター及び釧路港耐震旅客船岸壁と隣接する会場とすることができた。これにより、多くの参加者がすべての会場に足を運ぶことができた。

(2) 実行委員会の設立

ふゆトピア・フェアの開催に当たっては、従前から実行委員会を設立し、実施される事業の企画、予算管理、

事業の運営を行ってきた。今回についても平成25年6月6日に実行委員会を設立した。実行委員会の構成については、開催地である釧路市をはじめ、北海道開発局、北海道、(一社)日本建設機械施工協会、(社)雪センター、(一社)北海道開発技術センター、(一財)北海道道路管理技術センターに加え、本フェアから新たに東日本高速道路(株)北海道支社、(一社)北海道建設業協会、釧路建設業協会の3機関が加わり10機関で構成し、官民が一体となって取り組む体制とした。

(3) 開催テーマの選定

開催地である釧路市は北海道の中でも冬期に晴天が多く、豊かな自然による様々な観光資源に恵まれていることから、様々な取組を通じ寒冷地の冬期の地域づくりに関する知恵や文化が広がることを目指し「自然あふれるふゆの魅力」を「道東」から発信!」をテーマに選定した。

5. 「2014ふゆトピア・フェアin釧路」の概要

「2014ふゆトピア・フェアin釧路」は、平成26年1月23日(木)～24日(金)の2日間開催した。開催に当たっては、より多くの一般の方々に来場頂けるよう一般向けチラシ(写真-1)を作成し、釧路市内の公共施設などに配布するなど本フェアのPRを行った。フェアの概要については、次のとおりである。



写真-1 【一般向けチラシ】

(1) 「ふゆトピアシンポジウム」

「ふゆトピアシンポジウム」は、開催を通じ広く「観光」の現状や重要性を周知するとともに、より多くの市民に対し議論を呼びかけ、道東観光の玄関口である釧路の冬期観光を発展させる契機となるよう、「道東エリアの冬期観光の展望について～観光資源の掘り起こし～」をテーマとして、1月23日(木)に行われた。

基調講演では、北海道大学観光学高等研究センターから講師をお迎えし、「道東エリアにおける冬期観光の現状と活性化」をテーマとして、観光に関する世界の潮流や道東の国境観光の可能性、世界遺産を目指す阿寒

湖・マリモの課題、阿寒湖温泉の入湯税に関する取組紹介など、貴重なご講話をいただいた。

基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、コメンテーターを釧路公立大学地域経済研究センターから、パネリストを道東エリアで観光、外食、交通など各分野の専門家5名の方を、さらにはコメンテーターとして基調講演講師をお招きして、計7名の方々により、「道東エリアの冬期の観光資源(=個性)の掘り起こし」をテーマとしてディスカッションを行った。パネリストの方々の専門分野における様々な経験・知識からの相互議論により道東エリアの観光における様々な課題が顕在化した有益な議論であった。

(2) 「ふゆトピア研究発表会」

「ふゆトピア研究発表会」は、積雪寒冷地の快適な生活環境づくりを目指し、幅広く地域の方々で議論し、情報交換を行うことを目的とし、1月24日(金)に行われた。

今回は、「豪雪・地吹雪被害と対策」、「冬期の道路管理と技術」、「冬期の観光支援と情報提供」の3つのテーマを柱とし、様々な立場の方から84件の論文応募をいただき、その中から40件を口頭発表論文とした。

(3) 「ふゆトピア展示会」

「ふゆトピア展示会」は、快適な冬の生活環境づくりのために必要な技術などを企業・団体・行政のブース展示により幅広く紹介し、積雪寒冷地の自然、生活文化などを発信することを目的とし、1月23日(木)～24日(金)の2日間開催した。

今回は、道内外の企業や団体から27件のブースを出展いただき、新型の防雪柵や雪滑り塗料、自然エネルギーを利用した融雪システムの雪対策関連の新技术などが展示されたほか、スポーツ関連では、平成26年に苫小牧市で国内初開催となるブルームボール世界大会の紹介も行われた。

また、本フェアに合わせて、作成された除雪車PRポスター「除雪者によろしく」(作成:(一社)日本建設機械施工協会)(写真-2)も展示され、来場者の目を引いていた。



写真-2 【除雪車PRポスター「除雪者によろしく」】

(4) 「除雪機械展示・実演・競技会」

「除雪機械展示・実演・競技会」は、1月23日(木)～24日(金)の2日間開催した。

展示・実演会では、7社1機関から最新鋭の高性能除雪機械を11台出展し、小型ロータリ除雪車による実演も行われた。

競技会(除雪車チャンピオンシップ)(写真-3)は、1月23日(木)に開催し、釧路・根室地区の除雪車オペレーター8名が参加。約200mのコース上を除雪ドレーザによりブレードの操作性や路側追従などの5項目について技術を競った。前述のとおり、釧路市は積雪量が少なく、特にフェア開催時は積雪がほとんど無かったことから、砂を雪に見立て実施した。

また、1月24日(金)には、地元の幼稚園の園児約90名が会場を訪れ、除雪機械の試乗、記念撮影を行った。その際、釧路のご当地キャラ「ゆうひっぴい」も会場を訪れ、園児たちを楽しませてくれた。



写真-3 【除雪車チャンピオンシップ】

(5) 同時開催

本フェアは、道内外から多くの方々が集まるイベントであることから、地域をPRし、地域活性化に繋げるため、地元や関係機関と連携し、「現地視察バスツアー」、「釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ活動紹介」、「土木学会100周年記念プレ企画DVD上映」、「東日本大震災パネル展」、「「イランカラプテ」キャンペーンパネル展」、「次回開催地「長岡市」～地酒紹介～」、「ハイウェイドライビングシミュレーター」、「物産販売コーナー」、「観光情報コーナー」といった同時開催イベントを行った。

特に「現地視察バスツアー」は、北海道では初めての試みであり、本フェアの参加者を対象とし、釧路市内のインフラや自然を巡る企画として実施した。視察コースは、釧路合同庁舎から出発し、釧路市生涯学習センター(まなぼつと幣舞)から釧路市の都市構造や釧路港などのインフラの状況を眺望し、一般国道38号釧路新道釧路IC(仮称)・北海道横断自動車道阿寒IC(仮称)の工事現場の視察、釧路市丹頂鶴自然公園の視察、たん

Isami Furukawa, Tetsuo Takahashi, Yohei Harada

ちよう釧路空港の視察とした。チラシ(写真-4)を作成し、広く周知した結果、当初の募集定員が40名のところ約60名の応募があり、参加者からの関心も高く、また後述のアンケート結果からも非常に好評であった。



写真-4 【現地視察バスツアーチラシ】

6. アンケート結果から

フェア開催中、今後のふゆトピア・フェアの企画の参考とするため「全体アンケート」、「シンポジウムアンケート」、「現地視察バスツアーアンケート」を実施した。

(1) 全体アンケート

「全体アンケート」については、97名から回収。特徴的な項目については次のとおりである。

a) 参加者の職業

図-1に示すとおり、「公務員」46名(約47%)、「会社員」28名(約29%)、「建設業」16名(約17%)となっており、約半数が公務員であった。

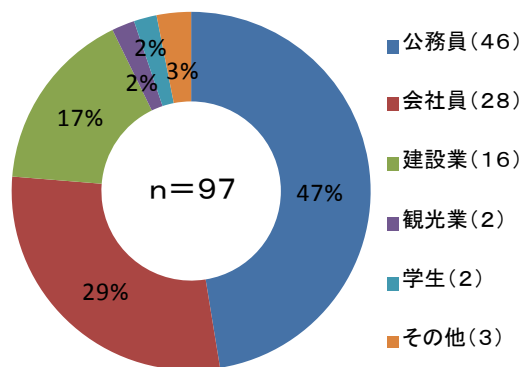


図-1 【参加者の職業】

b) 参加者の居住地

図-2に示すとおり、「釧路市」30名(約31%)、「道内(釧路市を除く)」34名(約35%)、「東北・北陸地方」22名(約23%)であり、全体の約34%が道外からの参加となっている。

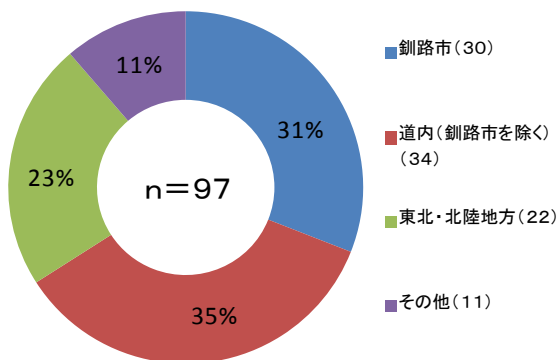


図-2 【参加者の居住地】

c) 参加者の宿泊数

図-3に示すとおり、「1泊」28名(約29%)、「2泊」25名(約26%)、「3泊以上」7名(約7%)であり、全体の約62%が宿泊をした。

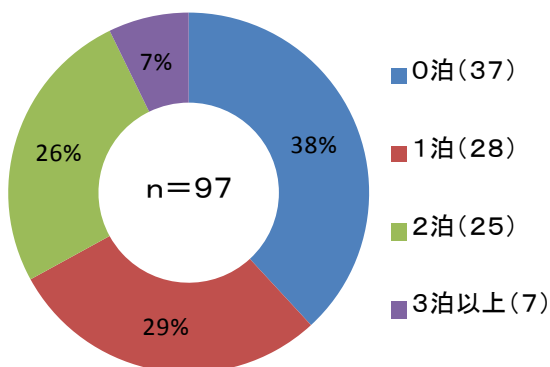


図-3 【参加者の宿泊数】

d) 本フェアを何で知ったか

図-4に示すとおり、「人から聞いて」37名(約36%)、「ホームページ」23名(約23%)となっており、「FacebookなどのSNS」は1名(約1%)となっている。

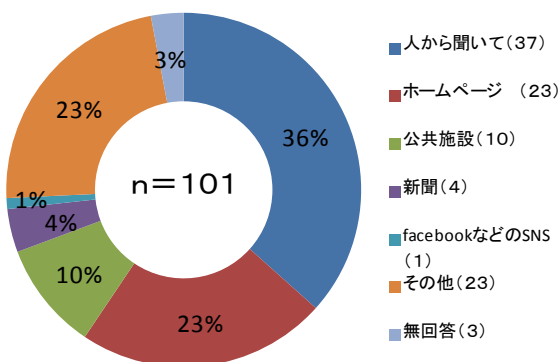


図-4 【本フェアを何で知ったか】

e) 全体アンケートの結果から

上記a)~d)の結果から、フェア全体では、参加者の約半数が公務員であり、一般の方々の参加を増やすためフェア自体のPRについて新たな方法を検討する必要があると考えられる。また、SNSによるPRの効果が薄か

ったことから、単にSNSに掲載するに止まらず、広く展開する方法を検討する必要があると考えられる。

(2) 「シンポジウムアンケート」

「シンポジウムアンケート」については、118名から回収。特徴的な項目については次のとおりである。

a) 参加者の職業

図-5に示すとおり、「公務員」61名(約52%)、「会社員」22名(約18%)、「建設業」17名(約14%)となっており、全体アンケート同様、約半数が公務員である。

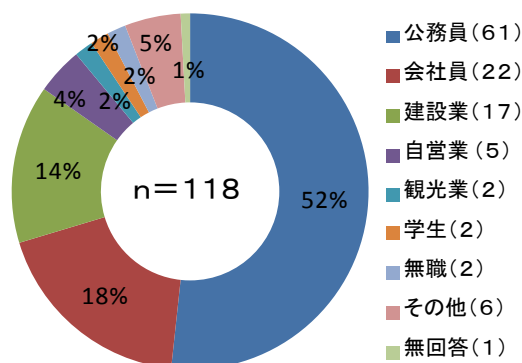


図-5 【参加者の職業】

b) 参加者の居住地

図-6に示すとおり、「釧路市」48名(約41%)、「道内(釧路市を除く)」42名(約35%)、「東北・北陸地方」20名(約17%)であり、全体の約23%が道外からの参加となっている。全体アンケートの結果と比較すると「釧路市」の割合が上がっていることから、地元の関心が高かったと考えられる。

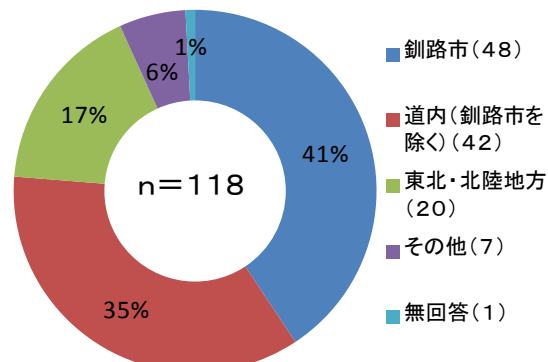


図-6 【参加者の居住地】

c) シンポジウムに参加した理由

図-7に示すとおり、「道東の観光について興味があったから」65名(約40%)、「冬期観光に興味があったから」57名(約35%)、「出演者に興味があったから」26名(約16%)であり「観光」への関心が

高いと考えられる。

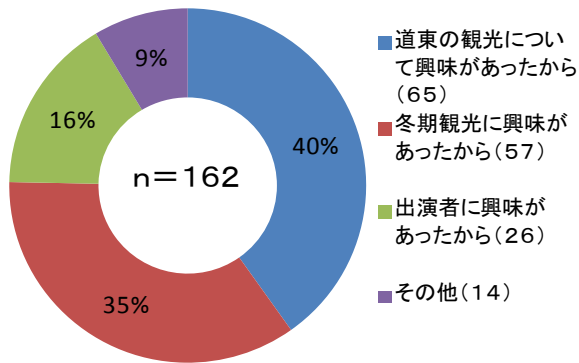


図-7 【シンポジウムに参加した理由】

d) 今後、聞いてみたいテーマ

図-8に示すとおり、「交通・インフラ整備について」76名(約44%)、「防災について」37名(約21%)であったが、「観光について」55名(約32%)があり、地方都市において観光という分野に対する期待感があることを示していると考えられる。

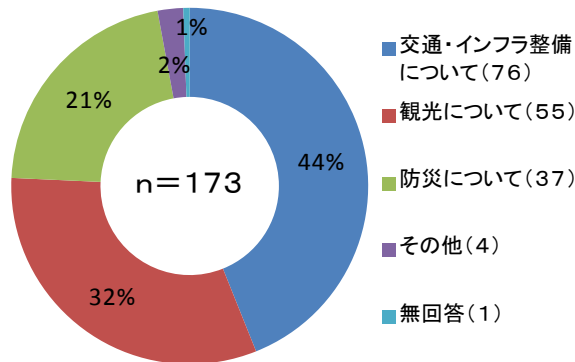


図-8 【今後、聞いてみたいテーマ】

e) また、同様のシンポジウムがあれば参加したいか

図-9に示すとおり、「ぜひ参加したい」41名(約35%)、「参加したい」66名(約56%)であり、合計すると約91%がまた参加したいと回答した。

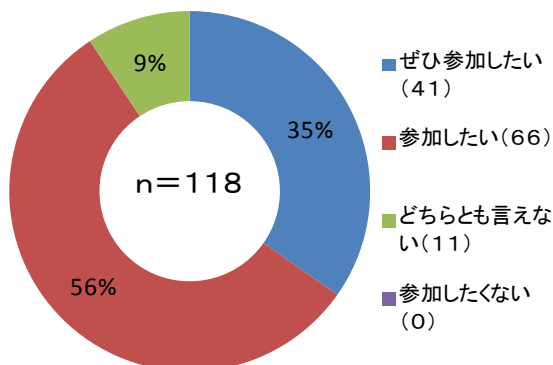


図-9 【また、同様のシンポジウムがあれば参加したいか】

f) 「シンポジウムアンケート」の結果から

上記a)~e)の結果から、シンポジウムについても、全

体アンケート同様、参加者の約半数が公務員であり、一般の方にも参加いただけるようPRの方法などの検討が必要であると考えられる。また、テーマについても、観光に対する関心、期待が高いと考えられる。再度参加したいという回答の多さからも、シンポジウムについては一定の評価を得られたと考えられる。

(3) 「現地視察バスツアーアンケート」

「現地視察バスツアー」については、52名から回収。特徴的な項目については次のとおりである。

a) 参加者の職業

図-10に示すとおり、「建設業」17名(約33%)、「会社員」13名(約25%)、「公務員」12名(約23%)となっており、他のアンケートと異なり、公務員以外の参加が多い結果となり、一般の方の関心が高かったと考えられる。

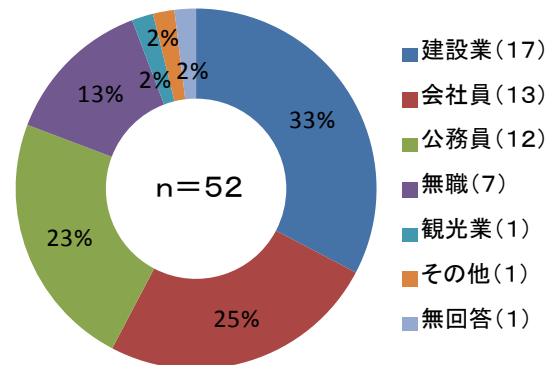


図-10 【参加者の職業】

b) 参加者の居住地

図-11に示すとおり、「東北・北陸地方」13名(約25%)、「その他」18名(35%)であり、全体の約60%が道外からの参加となっている。また、地元「釧路市」からも10名(約19%)の参加があった。これは、地元在住であっても公共施設の現地視察を行う機会が少なく、関心を高めたものと考えられる。

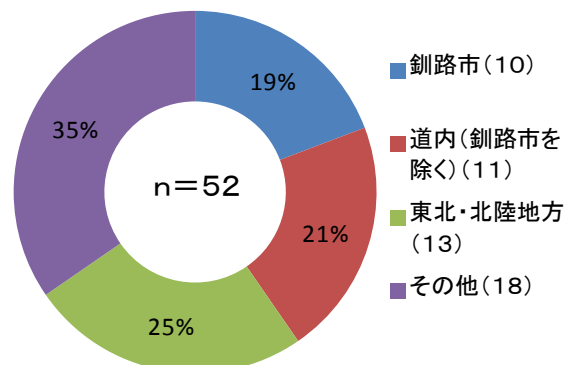


図-11 【参加者の居住地】

c) 参加した理由

図-12に示すとおり、「工事現場を見学してみたか

ったから」27名（約26%）、「釧路のインフラについて興味があったから」23名（約23%）であり、全体の約50%が現場、インフラといったキーワードに関心を示したと考えられる。また、「タンチョウを見たかったから」が20名（約20%）おり、タンチョウが観光資源となり得ることを示していると考えられる。

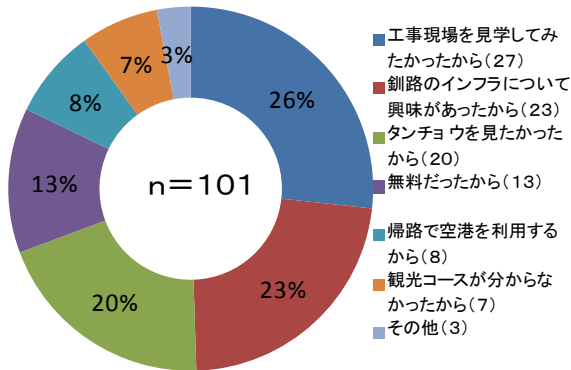


図-12 【参加した理由】

d) 今後、同様のバスツアーがあれば参加したいか

図-13に示すとおり、「ぜひ参加したい」26名（約50%）、「参加したい」19名（約37%）であり、

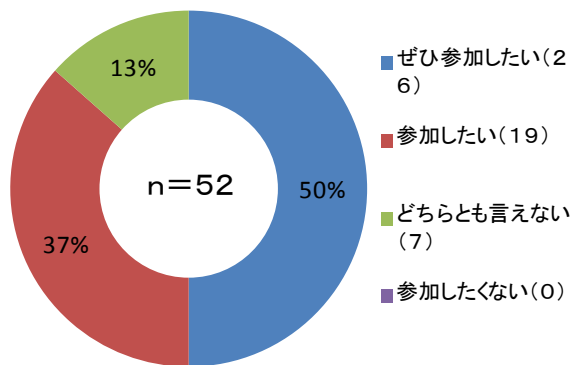


図-13 【また、同様のバスツアーがあれば参加したいか】

合計すると約87%がまた参加したいと回答しており、本ツアーについては、参加者から一定の評価を得られたと考えられる。

e) 「現地視察バスツアーアンケート」の結果から

上記a)～d)の結果から、普段は個人で見ることができない工事現場などは地元在住の方であっても高い関心を示すことが明らかになったことから、これまで観光資源として考えられてこなかった公共施設についても、潜在的に観光資源としての価値を有しており、今後、新たな活用方法を検討することにより、地域の活性化に繋がる可能性があると考えられる。

7. おわりに

「2014ふゆトピア・フェアin釧路」は、各方面のご協力と実行委員会の各構成員が、事前準備の段階から、連携し取組を進めたこともあり、延べ約4,900名の参加を賜り、盛況の中終了することができ、一定の評価を得られたと考えられる。

また、会場の集約、現地視察バスツアーの実施、各種チラシの作成など、これまでに無かった取組を行ったことも一定の成果があったと考えられる。

さらには、観光にスポットを当てシンポジウムを企画した結果、関係者の中にも観光に対する高い関心があること、インフラが新たな観光資源としての可能性があることも明らかとなった。このようなニーズに対し、新たな方向で取組を行うことにより、地域の活性化に繋がる可能性もあると考えられる。

ふゆトピアの取組が冬期の諸問題の解決のみならず、開催地域の発展に繋がるよう今後も努めていくとともに、様々な地域活動においても、官民の連携・協働により地域の活性化に努めて参りたい。